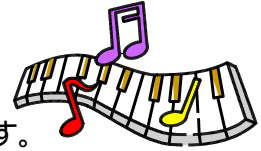


飛 翔

広島市立安佐中学校 生活だより
平成23年11月16日 No59

「心を伝える」本番近づく 11月22日(火)

ふれあい文化旬間の最後を締めくくる「心を伝える」の本番まで、1週間をきりました。今日まで「合唱・群読」に関して、担任の先生や音楽科の先生から、さまざまなアドバイスをもらい、各学級ともがんばって練習に取り組んできたことと思います。



先日(14日)からは、「暮会」での練習も可能になっています。(ただし、「暮会」での練習は、必ず教室で行いましょう。廊下などに出てはいけません。練習時間を厳守すること。)

どの学年、クラスとも、練習に熱を帯びていますが、あなたのクラスの仕上げ具合は、どうでしょうか？どの学年も先週、体育館での「学年交流会」を終え、自分のクラスの課題も、見えてきたはずです。これからの練習は、これらの課題をいかにしてクリアしていくかが重要なポイントになってきます。一見(一聴)すると「完成」したように見える(聴こえる)合唱も、これからの「練習」で、いくらでもレベルアップする可能性を秘めている場合があります。自分のクラスの「心を伝える」で、「伝えたい思い」を今一度確認して、これからの「練習」に力を注いで下さい。

ここで、あらためて言うまでもないのですが、「合唱」には、「技術」が必要であり、同時に「気持ち」もまた必要であるということです。例えば、どんなに「歌」に、気持ちを込めようとしても、音程もとれず、リズムもデタラメでは、聴いている人に「心」が届くでしょうか？そんな歌では、「歌詞」の意味を味わう前に、不快になってしまうかもしれません。せっかくの美しい「メロディー」も、素晴らしい「歌詞」も、聴く人の胸を打つことはできないでしょう。

では、「音程」も完璧(かんぺき)にとれ、「発声」も申し分なく、技術的にはパーフェクトであったとしても、その歌に「気持ち」が入っていないとしたら、どうでしょう？その歌は、聴く人の心に「感動」を与えるでしょうか？

答えは「NO」です。あくまで「NO」です。

気持ちの入っていない、心のこもっていない歌に、人を感動させる「力」があるわけがありません。ましてや、歌っている自分自身が「感動」できるわけがありません。

あなたが、あなたの学級のみなが、「心を伝える」の当日までがんばり続けた、その「気持ち」が、その歌にかけた「気持ち」が、あなたの学級の「歌」にのりうつるのです。そして、本当の意味で、そのときにはじめて「あなたの学級の歌」になるのです。そうなったときに、はじめて、その歌が人の心をつくのです。

**だから…今日まで練習を積み重ねてきたのです
技術を磨き、歌に気持ちをこめるために**

「心を伝える」に向けて

「発表」以外の大切なもの

「心を伝える」の目的は「心」を「伝える」だけではなく「心」を「受けとる」ことにもあると考えます。どの学年、どのクラスも、本番に向けて、「一生懸命」の努力をしています。そんな他の学級の発表に対し、「笑ったり」、「ざわついたり」などという行為は、絶対にあってはいけないことだと思います。これは、一生懸命がんばっている「仲間」を大切に、「マナー」以前の「人」として大切なことだと思います。

がんばっている「仲間」の「心」をしっかり受けとりましょう。

「ふれあい文化旬間」～展示・ステージ発表終わる



吹奏楽部



組さん

先日(11日)に、「ふれあい文化旬間」の「展示・ステージ発表」が行われました。



演劇部



美術部

展示部門は「美術部」、「コンピュータ部」の作品をはじめ、「組さん」や美術・国語・社会での授業作品など、見応えのある作品を鑑賞しました。

その後、体育館にて、「ステージ発表」を鑑賞しました。最初は「組さん」による群読・演奏。この日までの一生懸命の練習の成果がしっかり伝わった感動的な発表でした。

次に「演劇部」の発表「最終列車」。



コンピュータ部

難しいテーマでしたが、見事に演じきってくれました。素晴らしい舞台でした。

ラストを飾ったのが「吹奏楽部」。最終楽曲は、なんと「フライングゲット」。演奏はもちろん、踊りまで入って大いに盛り上がり、素晴らしい発表でした。

まさしく「文化の秋」を彩るにふさわしい一日でした。

文化委員をはじめ、生徒会執行部のみなさん、本当にごくろうさまでした。

1, 3年生PTC行事「文教太鼓」

11月7日(月)

先週(7日)の6時間目は、1年生、3年生のPTC行事「文教太鼓演技」が本校で行われ、文教高等学校の生徒のみなさんによる「和太鼓」の演技を鑑賞しました。

部訓である「和」を大切に、日々練習に励んでいる高校生のみなさんのすばらしい演技は、保護者の方を含め、1、3年生のみなさんの心に「感動」というかたちで届いたことでしょう。演目の「文教“絆”」、「文教“太鼓囃(ばや)し”」、「文教“三宅太鼓”」、「文教“二挺太鼓”」どれも、メリハリのあるキビキビとした動き、シャンと背筋の伸びた姿勢、微動だにしない頭、そして正に「迫力」という言葉がピッタリの力強い演奏、一糸乱れぬ「呼吸」の合わせ、どれをとっても、間もなく「心を伝える」の本番を迎えるみなさんにとって、すばらしい「お手本」にもなったのではないのでしょうか？

最後は、各クラスからの代表の人も参加しての大演奏。最初は、照れながらも高校生の指導を受け、最後には、演奏らしくなってきました。